

冬の獣医日記

井上武夫

(一) キノコ発生期による区分 ①しいたけは、春に集中的に生えるものを春型といい、②秋期気温下降期に発生するものを秋型③夏か秋に比較的高い気温のときに発生するものを夏秋型という。しいたけはその環境によっては意外な時期に生える特長があり、この特長を活用して不時栽培ができる。

(二) 傘(かさ)の大きさ しいたけは傘の大小により大葉、中葉、小葉に分けられ、干しいたけには大、中葉、生しいたけには中、小葉が好まれる、もつとも管理の仕方によってはキノコの大小、厚い薄いができる。(後記)

(三) かさの厚さ かさの肉の厚いものをドンコ、薄いものをコーシンといっている。生しいたけでは、かさが開ききらないものであればどれもよい、輸出用にはドンコが好まれ、同じ干しいたけでも国内用はコーシンが喜ばれる。

(四) かさの色 かさの色は褐色がかった淡色の系統と黒味がかった濃いものとあるが、どれもよいが色調がそろっていることが大切である。

(五) 軸(足) 品種によっては足の長いものがある、足は食用としない、従って生しいたけの出荷時には足を切って函入れするなど手数料がかかるので良品種とはいえない。

われわれは、採算ベースにのせるためには、生しいたけ(不時栽培を考慮)か干しいたけかの目標をたて、次に春、秋型などの楕木数の割合などをきめる必要がある。次に、当研究所育成の品種を述べよう。

第二 北農園の品種の特長

一 北農園の生い立ち さて、筆者は本道しいたけの秘けつは、適品種の発見にあることを自覚し、まず、知人、同窓のご協力もあり、本道の山野に自然発生している、しいたけ集めを考え、初年度三七カ所、二年度一六カ所から収集することができた。

しかしながら、この中には、同一品種と思われるもの、発育、発生が悪いもの、形の悪いものなどなかなかよいものがなかったが、幸い最初に現在の北農七号菌の発見に成功し、その後研究の結果、このほか三品種の本道的なものを選出することに成功した。ところがこの壮挙をみて激励してくださったのは恩師である現酪農大学の川村先生である。先生から「この品種は独占することなく、同好者に分譲せよ」との教訓をうけ、これを契機に私は単なるしいたけ作りから、研究所の設立にふみきり、現在では胞子の交配による新品種の育成と科学的栽培法の研究に没頭していることを申し添え、みなさまのご協力、ご支援を仰ぐ次第である。

二 北農園の品種と特長

しいたけ菌

北農七号 中葉、厚肉、淡褐色、鮮明な鱗毛あり豊産、生、干用

北農二十一号 大葉、中肉、淡褐色生、干用

北農二十三号 大葉、厚肉、茶褐色、生、干用

北農三十四号 中葉、中肉、茶褐色、比較的高温時に発生

(注) 四品種のうち北農七号と三十四号は生しいたけで市場情勢とマッチできる特長がある。

(筆者は北農食菌研究所長 吉水秀雄氏)

酪農のガン

○月○日、冷え込む朝、ヒゲも剃る気になれず洗面も簡単にすませます。今日の予定は隣村の繁殖障害検診、冷えきったオートバイのキックが重い。途中気をつけるようにと妻が促すように言う。現地には最早七、八頭の問題牛が待っていた。積雪期間の戸別検診は容易でなく、村の家畜診療所が集合場所にきめられた。「早う子ツコがとまらん」といひ正月が出来んわい……胸をうつ誰かの声。「はい次はAさんだよ、枡場」に牛を入れて……」とS獣医の声。枡場に入る乳牛の鼻いきが太く白く流れた。上衣を脱ぎすて下衣の袖をまくりあげると、右腕は鳥肌がたち全身がヒンヤリしてくる。思わず身ぶるいする。一五頭の空胎牛の検診が終わったのは午後二時半、中食おあずけのふん闘であった。寒さが骨ずいに及んだ。ストーブを囲みながら酪農家にそれぞ



1 検診に集まる空胎牛群

れ内診の結果をつけ今後の処置につき指示を与える。発情が二、三回とんだと言う受胎困難牛が二頭、こ

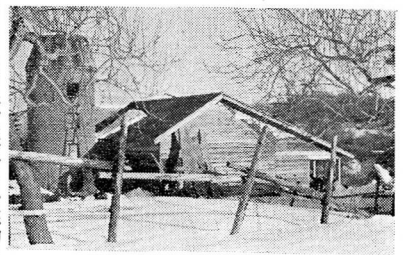
れに夢をたくしたのだが。とまったのは子でなくまさしく発情であった。人工衛星がとぶ時代と言うのに、地上の人工授精の成績はふるわず、検診のたびに空胎牛が恰も家畜品評会を思わせるが如く列を作るのは一体何が原因で、誰の責任なのだろう。淋しくなる。(写真1)畜主が授精師にケチをつけ、授精師は畜主の欠陥を指摘する事はそれぞれ理由あつての御意見ではあるうが乳牛の子孫をこしらえようと同一目的であつてみれば、両者共々反省と研究の余地があるう。……夫婦相和して子孫生ず……

酪農即人

○月○日、車庫前の雪投げに一汗かくのは最近の日課である。次々に往診依頼の電話がひびく。……食滞、後産停滯、乳房炎……早朝の雪道は軟かく四輪車のわだちを頼りに真直ぐ走るのは骨が折れ、幾度かはずれては愛車ごと雪だるまとなる。オートバイの時代ではないと口にしながら曲がったバンパーをなおよす。深雪になったとたん患者がふえたように思えてシャクにさわる。辿りついたA酪農家の患者は明らかに栄養失調による起立不能症である。治療がすま病牛の管理につき指示を与えて立去らんとしたが、レンガのサイロに進路をさえぎられてしまった。まてよ、若い病牛にはエンシレーションが与えられていただろうか。稲わらだけではなかつたか。まさしく……働かざるものは食うべからず……他の搾乳牛

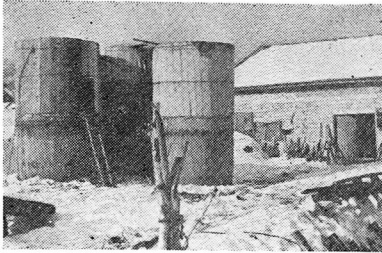
だけが恩恵をこうむっているではないか。

飼料の質が悪く、絶対給与量が不足し給水と運動が不



2 立派なレンガサイロなのだが

らず成牛に限らず起立不能症は必然的に起りうるであろう。冬に向ったばかりというのに何たることか……。酪農家の施設についても言えることは多い。事実、おかしな事にサイロがありながら良質のエンシレーシが出来ないばかりか、充分材料が踏み込まれていない酪農家が多いにも多いこと。(写真2)大きな尿溜がありながら尿が溢れて目もあてられない光景が見られること等々。一方、サイロはないが古い大型の漬物樽を工夫したり、(写真3)トレンチサイロで立



3 大型漬物樽を利用したサイロ

派なエンシレーシを作っている所もある。これは一体どういうことだろうか。飼料作物の

栽培管理と収穫貯ぞうについても、人により大差があり不思議でならない。……企業は人なり、酪農は企業なり、しからば酪農は人なりと言えそう。家畜に対する愛情が欠けているこのA酪農家の将来を思う時、忠告の言葉を惜しんではなるまい。道を改めて家族と話しあうことを心に誓い雪道を急いだ。

「花嫁ヤイ」

○月〇日、当地へ赴任してやがて満四年になる。住めば都とはよく言ったものになる。土地になじみ人との交際も深まり、業務にも慣れると離れたいこの頃である。ポーンが来た最初の日曜日は、家族づれで買物に出かける約束をしていた。その朝が来た。妻や子供達も早、気はデパートにあるかに思われ、はしゃいでいた。その時、突然の乗客、子供達の夢は完全にうばわれてしまった。乗客Bさんの用件は、長男に嫁をとりたいのだが探すのに骨を折ってほしい……との一大用件であった。この事はBさんに限らず酪農家の共通の悩みである。同じ相談を数えてみれば、ざっと四、

五件はあろう。この世に探す嫁と、嫁に出す娘の割合が偏るはずがないのに、嫁探しの相談ばかりで娘を酪農家の嫁にしたい話は聞いた事がない。これでは縁の結びようがないではないか。息子には農家の娘にしたいし、自分の娘は農家にやりたくないと言ふ世の親達の矛盾した話が、このよう

な一大用件になるのであろう。……酪農家の将来が思いやられて頭が痛い。
「工夫して生かした草地でもう一頭」

○月〇日、吹雪の故か往診依頼もなく、カルテの整理や薬品棚の整理を終え久しぶりに机に向う。吹雪はおさまりそうもない。突然、「先生いますか……」と全身雪だらけのKさんが事務所にかけ込んで来た。顔面は真赤である。「ひどい吹雪ですね……」と番茶を差し出すとゾロゾロと音をたてて呑みほした「今日は仕事ならんし油、うりに来ました……」「たまには工場にも顔を出してもらわんと……」そう言いながら話

はだんだん酪農に結びついて行く。「ところで、乳価は下がるんでしょうね……」「新開みると何んだかんだ言ってますが……」「物価は上り乳価は下がる……配合飼料も近く高くなるか……一体どうなるんでしょう……」「乳牛が安いのもそのせいでしょね……」「生産者のKさんしてみれば無理もないこと。」

『しかしKさん、乳価は政府と農業団体、会社の話し合いで決められるようになったし一応安定したも同様でしょう。これから貿易自由化の時代だから、はなやかな集乳合戦もなくなるでしょう。酪農は国際的農業ですし、米作りとは格が違いますよ。』
「この前ある酪農家が……乳価がウーンと下がってくればよい、そうすれば都市の搾乳専門家が牛を飼えなくなるし、牛乳もダブつかなくなり、われわれ酪農家の牛乳も値がくずれない。乳価が高過ぎるから都市の一腹搾りがはびこる……と言ってますよ。今は乳牛が安い。初妊牛だって一〇万円しないし、生まれおちの牡犢は七、八、〇〇〇円しかしない。だから今のうち買

集めると言っているんですよ。きつと近いうちに反動が来ますよ。二月か三月頃から値上がりするんでないですか。配合飼料が高いのは、原料の殆どが輸入されていること、これに高い関税がかかり、それに船賃が高いのだから当分値下がりしないと思つてよい。結局、外国の乳製品が安くどんどん輸入されると、乳価もこれ以上期待出来ない、配合飼料も安くならない……。とすれば生産費の五〇%を占めていると言う飼料代を引き下げるとか、頭数をふやすとかしなければ、つまり良質の自給飼料を大量に作るよりほかない。

だからと言って何も酪農を悲観視することはないのですが……。大体、日本で牛乳が余るなんておかしな話じゃないですか。乳製品に廻す分まで含めて一日、三人で一合しか飲んでいない。生産量の半分が乳製品だから、実際には五勺を三人、六人で一合しか飲まない国民だと言え。国民一日一人三合論を実施するとすれば、一体どうなるのですかね……。『うん、うん』と背いていたKさんは、『いやーよく解りました。全くその通り……』と細い眼をさらに細めて笑った。Kさんは、手渡された雪印のたね案内号を少しめくって、『ふーんいいことを書いてある……放けい牧地の造成と管理——手間をかけずにたくさん牛乳を搾るために——うーん……』と感心して読んでいる。最近搾乳牛を一頭ふやしたと言ふKさんのことだ。きつと今年もよい牧草を作ってくれることだろう。

(雪印乳業余市工場酪農係)